

NHK

評論家 渡辺京二さん死去 92歳 評論「逝きし世の面影」など

2022年12月25日 18時21分

代表作「逝きし世の面影」をはじめ、日本の近代を問う多くの著作を残し、4年前に亡くなった作家の石牟礼道子さんを支えた評論家の渡辺京二さんが25日、熊本市の自宅で老衰のため亡くなりました。92歳でした。

渡辺京二さんは、京都府で生まれ東京の大学を卒業後、両親の出身地だった熊本で「公害の原点」と言われる水俣病の患者たちが起こした裁判などの支援に関わりました。

文芸雑誌を創刊して編集も行ってた渡辺さんは、その活動の中で4年前に亡くなった作家の石牟礼道子さんと出会い、患者や家族の苦しみを描いた石牟礼さんの代表作「苦海浄土」の編集に携わるなど、半世紀にわたって、執筆活動を支えました。

渡辺さんは、幕末から明治にかけて生きた日本人の姿を、当時、日本を訪れた膨大な外国人の記録をもとに記した代表作「逝きし世の面影」をはじめ日本の近代を問う多くの著作を残しました。

親族によりますと、渡辺さんは25日、熊本市の自宅で老衰のため亡くなりました。

92歳でした。

"水俣病の患者救済への道を開いた"

渡辺京二さんと長年、交流を続けてきた作家の米本浩二さんは、石牟礼道子さんとの2人の作品が水俣病の患者救済への道を開いたと言えるのではないかと指摘しています。

米本さんは「渡辺さんは、石牟礼さんの書いたものをより分かりやすく解説して人々に届ける役割を担っていて、水俣病をめぐる闘争では、患者さんをことばで支え支持を得ていた。闘争の一線を退いてからも石牟礼さんの、ほぼすべての作品の清書を行うなどサポートを続けてきた。また、自分の著作でも、教科書に載っていない庶民の目から見た歴史『小さき者』という言い方をしていたが『小さき者』の視点からの歴史を書き続けていて、渡辺さん自身も石牟礼さんから学んだことが多かったのではないかと話していました。

そのうえで「お元気だったので亡くなったと聞いて本当にびっくりしている。渡辺さんの水俣病の患者さんを助けたいという思いは強かった。水俣病の歴史がだんだん風化しているように思うが、渡辺さんや石牟礼さんの著作を通じて歴史をたどることで、今も続く患者さんの苦しみを理解できると思うので、著作を読んでもらいたい」と話していました。

朝日新聞

思想史家の渡辺京二さん死去 92歳 代表作に「逝きし世の面影」

2022年12月25日 16時56分

幕末明治の日本人の生き方を描いた「逝（ゆ）きし世の面影」などで知られる思想史家の渡辺京二（わたなべ・きょうじ）さんが25日、老衰のため熊本市内の自宅で死去した。92歳だった。通夜は26日午後7時から、葬儀は27日午後1時から、熊本市東区健軍4丁目の真宗寺で。喪主は長女の山田梨佐さん。

京都府生まれ。中国・大連や、母親の郷里の熊本市などで育った。法政大学卒業後、書評紙の編集者を経て熊本に戻り、65年、雑誌「熊本風土記」を創刊。当時、熊本県水俣市の主婦だった故石牟礼道子さんに執筆を依頼、小説「海と空のあいだに」（後に「苦海浄土」として出版）を受け取り、同誌に掲載した。

69年、石牟礼さんの要請に応じて「水俣病を告発する会」を仲間と立ち上げ、原因企業チッソとの補償交渉に臨んだ患者と家族らを支援した。その経験から、経済成長を追求して飽くことのない近代以降の社会を見つめ直す論考を重ねた。

代表作「逝きし世の面影」（98年刊、99年度に和辻哲郎文化賞）では、人々が質素ながら満ち足りて暮らした江戸という文明が、近代化によって失われたことを描き出し、現在の社会を相対化する視点を示した。

79年度に「北一輝」で毎日出版文化賞。江戸幕府や先住民族アイヌ、ロシアによる交流史を描いた「黒船前夜」で、10年度に大佛（おさらぎ）次郎賞を受けた。18年度に「バテレンの世紀」で、読売文学賞評論・伝記賞。

「文学的同志」として、石牟礼さんの執筆を半世紀以上にわたって支えた。石牟礼さんが18年に亡くなるまで、熊本市の療養先に毎日のように通い、口述筆記の手伝いや身の回りの世話をした。21年4月から、地元紙「熊本日日新聞」に幕末明治の人びとの心のあり方を描く連載「小さきものの近代」を持ち、亡くなるまで書き続けた。

渡辺さんから誘われ、16年から熊本で発行する文芸誌「アルテリ」の編集人となった田尻久子さん（53）は朝日新聞の取材に、「ニヤッと笑う笑顔が忘れられない。チャーミングな人でした」と振り返った。顔を見るたび、田尻さんが熊本市で開く「橙（だいたい）書店」について「店は大丈夫か？若い人は来てるのか？」と、気にかけてくれたという。

最後に会ったのは今年の夏。作家で画家の坂口恭平さんとの対談に立ち会った時だ。「最初は体がしんどそうでしたが、話し出すと元気になった」という。対談は8月に発行されたアルテリ最新号に掲載された。

現在、エッセーの執筆もする田尻さんに書くことを薦めてくれたのも渡辺さんだった。「あなた上手なんだから書きなさいって。私はものぐさだから、渡辺さんがいなかったら書いてないと思います。渡辺さんがいないなんてつまらなくなっちゃう」と涙をぬぐった。

近代史家・渡辺京二さん死去 92歳 石牟礼道子さんの編集者
毎日新聞 2022/12/25 19:09 (最終更新 12/25 21:36) 556文字

渡辺京二さん

作家の石牟礼道子さん（1927～2018年）を編集者として支え、自身も近世から近代を主題にした「逝きし世の面影」などを著した日本近代史家、渡辺京二（わたなべ・きょうじ）さんが25日、老衰のため死去した。92歳。葬儀は27日午後1時、熊本市東区健軍4の17の45の真宗寺。喪主は長女山田梨佐（やまだ・りさ）さん。

65～66年に地方文化雑誌「熊本風土記」を12冊出版。そこで連載した石牟礼さんの「海と空のあいだに」は戦後日本文学の金字塔「苦海浄土」の原形となった。以降、編集者として石牟礼さんの元に通り原稿の清書や資料整理、炊事を担当。交友は半世紀を超えた。石牟礼さんと共に水俣病患者を支援する「水俣病を告発する会」の発足にも関わった。14年には熊本市で「石牟礼道子資料保存会」を結成し石牟礼文学の顕彰に力を注いだ。

日本近代史家としては「北一輝」（毎日出版文化賞）「評伝宮崎滔天（とうてん）」などを発表。和辻哲郎文化賞を受賞した「逝きし世の面影」では幕末・明治初期の外国人の証言を積み重ね、近代化で滅びる前の日本を描き出した。桃源郷のような日本の姿は共感を呼び10万部を超えるベストセラーに。続編の「黒船前夜」では大佛（おさらぎ）次郎賞を受けた。30代以降、谷川雁（がん）や橋川文三、吉本隆明らと親交を重ねた。

読売新聞

「バテレンの世紀」「北一輝」…渡辺京二さん死去、石牟礼道子の執筆も支える
2022/12/25 19:43

「逝きし世の面影」などの著作で日本の近代を問い続けた思想史家の渡辺京二（わたなべ・

きょうじ)さんが25日、老衰のため死去した。92歳だった。告別式は27日午後1時、熊本市東区健軍4の17の45真宗寺。喪主は長女、山田梨佐さん。

渡辺京二さん

京都市生まれ。戦後、満州(現中国東北部)から親族のいた熊本市に引き揚げた。法政大卒業後、書評紙の編集者を経て熊本に戻り、1965年に雑誌「熊本風土記」を創刊。熊本県水俣市の主婦だった石牟礼道子の「苦海浄土」の初稿を掲載し、2018年に石牟礼が死去するまで半世紀にわたって執筆を支えた。

1998年刊行の「逝きし世の面影」は幕末・維新期の欧米人の日本滞在記を手がかりに、貧しくても精神的に豊かに暮らす庶民の姿を浮かび上がらせた。2000年に和辻哲郎文化賞を受賞した。近代日本の思想史をたどる「神風連とその時代」「北一輝」などの著作も執筆。日本と西洋文明との最初の接触を描いた「バテレンの世紀」で19年、読売文学賞を受賞した。

作家の池澤夏樹さんの話「歴史を物語として、人間を真ん中に置いてつづられた。最期まで現役を貫き、日本の歴史を東京や京都から見下ろすのでも、地元の熊本に寄りかかりすぎののでもなく、人々の生活の変容から描かれた方でした」

日本近代史家の渡辺京二さん死去、92歳 「石牟礼文学」編集者として支える
熊本日日新聞 | 2022年12月25日 21:06

日本近代史家で「逝きし世の面影」の著作や、作家の故石牟礼道子さんを編集者として支えたことで知られる渡辺京二(わたなべ・きょうじ)さんが25日午前、老衰のため熊本市内の自宅で死去した。92歳。

1930年、京都市生まれ。父親の仕事の都合で少年期を北京と大連で過ごし、現地で敗戦を迎えた。帰国後に両親の出身地の熊本へ移住。敗戦後の困窮と、後に病氣療養のため休学した旧制第五高等学校(現熊本大)時代の過酷な闘病生活、共産党への入党・離党の体験から、在野の研究者として近代的価値を乗り越える思想と個人の在り方を一貫して追求した。思想形成や執筆活動に影響を受けた評論家の故吉本隆明さんを師と仰ぎ、水俣出身の詩人、故谷川雁さんとの交流もあった。

65年、熊本で雑誌「熊本風土記」を刊行。石牟礼さんの作家としての才能をいち早く見だし、「苦海浄土[くがいじょうど]」の初稿を掲載、約半世紀にわたって執筆活動を支え

た。

近代を問う著作も多数執筆。幕末から明治にかけて日本を訪れた外国人の記録などを精査し、近代化で日本人が失ったものを浮き彫りにした「逝きし世の面影」で和辻哲郎文化賞を受賞。本紙夕刊の連載を書籍化した「黒船前夜—ロシア・アイヌ・日本の三国志」で大佛次郎賞、「バテレンの世紀」で読売文学賞を受賞した。

「暗河 [くらごう]」や「炎の眼」などさまざまな雑誌の刊行も手掛け、2016年には若い書き手を育てようと、文芸誌「アルテリ」を創刊。職業や社会的地位を超えた人との結び付きを重視した。

水俣病闘争では、石牟礼さんの呼びかけで結成された熊本の支援団体「水俣病を告発する会」の中心的役割も果たした。同会を率いた4年余りの間も機関紙「告発」を出し続けた。

本紙では21年4月から週1回、大型評論「小さきものの近代」を連載。幕末から敗戦まで激動期の日本を、名もなき市井の人々がどのように生きたかを細やかに描き、これまでに91回の掲載を終えていた。

「評伝 宮崎滔天」で熊日文学賞を受賞したほか、2010年に熊日賞。(澤本麻里子)